

氏 名 藤 井 玲 子
 学位の種類 博士（社会学）
 学位授与年月日 2013年3月31日
 学位論文の題名 日本メディア・リテラシー教育実践の到達点と課題
 —エンパワーメントの学びを目指して—

【論文内容の要旨】

本論文は、日本におけるメディア・リテラシーとして学校現場で行われてきた個別の実践事例の分析を通して、到達点と課題を明確にするために、自身が現職（高校教師）として行ってきた教育実践を踏まえ、クリティカル・メディア・リテラシーの理論から抽出した6つの要素を援用して、個々の実践事例について検証し、メディア・リテラシーが生徒の学びをエンパワーメントする可能性について、日本の学校教育における学びの問題点と解決への方略を提示しようとしたものである。

1. 本論文の構成

本論文は、若者がメディアを批判的に学ぶことの必要性が述べられ（はじめに）、これまでのメディア・リテラシー研究の経緯を踏まえ、エンパワーメントの学びとしてのメディア・リテラシー教育について整理しクリティカル・メディア・リテラシーの理論から6つの要素を抽出し（第1章）、日本の主要なメディア・リテラシー研究体系について整理している（第2章）。6つの要素を援用してこれまで蓄積されてきた実践事例を個別に分析し、到達点と課題を明らかにし、日本の学校教育における学びのあり方についてそうした結果が導き出された課題を学習指導要領の学習観を中心に考察し、従来の学びの概念を転換することが示されている（第3章、第4章、第5章）。

具体的な目次構成は以下のとおり。

はじめに

第1章 エンパワーメントとメディア・リテラシー教育

1-1 メディア・リテラシー研究の系譜

1-2 エンパワーメントと批判性

- (1) 批判的思考論における批判性 (2) 批判的リテラシー論における批判性
 (3) エンパワーメントの批判性

1-3 主要なメディア・リテラシー研究のエンパワーメントの観点からの考察

- (1) メディアの悪影響から保護される者 (2) 民主主義社会の担い手
 (3) 情報社会、メディア文化への参加者 (4) 文化や社会状況の変革者

1-4 エンパワーメントの学びとその要素

- (1) ユネスコの学習権宣言と子供の権利条約に関わって
 (2) グローバルな学習観に見られるエンパワーメントの要素
 (3) 社会学的想像力を生み出す学びを

1-5 エンパワーメントの学びとしてのメディア・リテラシーのモデル

第2章 日本のメディア・リテラシー研究のエンパワーメントの観点からの考察

2-1 日本のメディア・リテラシー研究の経緯

- (1) 「メディア・リテラシー」の登場 (2) 放送行政や教育行政との関わり

2-2 混用される用語

- (1) メディア・リテラシーと情報リテラシー (2) メディア・リテラシー教育とメディア教育
- 2-3 現在の研究体系のマッピングとエンパワーメントの観点からの考察
 - (1) 国語科におけるメディア・リテラシー教育 (2) 情報教育におけるメディア・リテラシー
 - (3) メルプロジェクトのメディア・リテラシー教育
 - (4) FCTメディア・リテラシー研究所と鈴木みどり／1. FCTメディア・リテラシー研究所／
2. 鈴木みどり（子どもとメディアという視点／「放送分野におけるメディア・リテラシーに関する調査研究会」／ジェンダーとメディアという視点／鈴木の定義とモデル）

第3章 日本のメディア・リテラシー実践の分析

- 3-1 先行研究の到達点と課題
- 3-2 分析の枠組み, 方法
- 3-3 実践事例の概観
- 3-4 教科の枠組みに関わって
 - (1) 国語科 (2) 情報科 (3) 総合的な学習の時間 (4) 社会科
- 3-5 教科以外の研究体系
 - (1) メルプロジェクト (2) FCT (3) 総務省の教材
- 3-6 メディア・リテラシーの評価についての研究
- 3-7 到達点と課題

第4章 日本のメディア・リテラシー教育実践の課題と学習指導要領

- 4-1 批判的な学びに関わって
 - (1) 民主主義の学習指導要領の登場と消滅 (2) 1989年指導要領と1998年指導要領
 - (3) 国語科と情報科の批判性
- 4-2 社会的文脈での読み解きに関わって
 - (1) 民主主義と社会科 (2) 目的を放棄した社会科 (3) 系統化された学び
- 4-3 「生きる力」と関わって
 - (1) 総合的な学習の時間との関わり (2) 総合的な学習の時間の課題 (3) PISA との関連性
- 4-4 中学生・高校生の社会意識
 - (1) 社会への参加意識の低さ (2) 従来の学びのありかたとの関わり

第5章 課題を乗り越えるために

- 5-1 学びのパラダイムの転換
 - (1) 客観的知識を問い直す (2) 対話で学ぶことの意義 (3) 「ふり返り」の重要性
- 5-2 実践への手がかり
 - (1) 社会科と国語科のクロスカリキュラム (2) 人権教育からのアプローチ
 - (3) 高校での実践を手がかりに（実践事例の枠組み／2010年度実施の概要／主体的な読み解き／
高校生の社会的な位置づけの認識／批判的分析から能動的な制作活動へ）
 - (4) 教材パッケージ（*Teaching TV News* の組み立て／求められる市民像

おわりに

2. 本論文の内容

はじめには、若者の中での階層化が進み、ハイパーメリトクラシーの社会は格差がより顕在化している一方、若者は社会の中で中心的な地位に位置づけられておらず、メディアとの関係も否定的に論じられている。そうした

若者とメディアとの関係性を主体的に捉え直し、若者がメディアを批判的に学ぶことで学びのエンパワーメントを再構築する可能性について触れ、現在まで行われてきたメディア・リテラシー教育実践をエンパワーメントの学びの観点から分析し、課題を明確にするという本論文の基本的な枠組みが提示されている。

第1章では、エンパワーメントの学びとしてのメディア・リテラシー教育とはどのようなものか、これまでのメディア・リテラシー研究の経緯を整理している。批判的リテラシー論に依拠するとされるクリティカル・メディア・リテラシーをもとに、子どもや若者が社会の不平等や不均衡を自分の問題として認識し、変革のため声を上げ行動して主体となることをエンパワーメントと捉え、批判的自律性と能動性を涵養することを目指そうとする。この考え方はC・W・ミルズの社会学的想像力という概念や、ユネスコを中心として展開されているグローバルな学習観とも通底するものとして捉えようとしている。そして、エンパワーメントの学びの観点からマスターマン、パッキングムなどイギリスの研究体系やカナダのオンタリオ州などで実践されているAMLの概念、情報モラル教育などが改めて位置づけられる。さらにエンパワーメントのメディア・リテラシーの学びのモデルと、そこに含まれると考えられる6つの要素（①テキストへ向かう批判性、②テキストの社会的文脈に向かう批判性、③自分の価値観へ向かう批判性、④作品を創り出し、表現していく能動性、⑤作品を公表し・発信していく能動性、⑥ふり返り）を明示する。

第2章では、第1章で明示されたエンパワーメントの学びのモデルを用いて日本の主要なメディア・リテラシー研究とメディア・リテラシー教育を体系として捉え、考察している。国語科では従来の文字中心から映像や音声を扱う学習にまで拡大されているが、依然として言語教育の枠組みにとどまり、日常生活を生きていく上でのスキルが中心とされる。情報教育ではメディア利用に重点を置いている。これらは情報社会によりよく参加する態度の育成が目標とされていると考察している。メルプロジェクトはプロの制作者との協働作業などを通じて、メディア文化の消費者としての一面を補強すると考えられる。FCTメディア・リテラシー研究所の研究体系では8つの基本概念と研究モデルを使用し、批判的に分析していくことに重点を置き、社会変革へ向けて踏み出す市民の育成が目標とされていることを明らかにしている。

第3章では、現在まで蓄積されてきた実践事例を個別に分析し、そこでの到達点と課題を明らかにしている。第1章で提示されたエンパワーメントの学びのモデルを用いて、そこに含まれるとされる6つの要素をもとに、個々の事例でそれらがどのように見いだされるかを検証しようと試みている。その結果、分析活動を行っている事例の約半数に批判性の要素は位置づけられず、テキストの社会的文脈や自分の価値観へ向かう批判性はほとんど含まれていない点を指摘している。最も多く行われている国語科での実践事例は「筆者の意図を読み取る」ことに止まる場合が多く、総合的な学習の時間と情報科では制作活動のみに重点が置かれているが、制作活動の事例では、ふり返りは少ない。社会科では社会的文脈に向かう批判性を含む実践も行われている。メルプロジェクトの事例は制作活動を中心としてメディアに対する批判的な視点の涵養は重視されていないことが明らかにされた。一方、FCTメディア・リテラシー研究所のStudy Guideのシリーズの実践事例では批判的な観点を養おうとするものの、制作や意見の発信の要素は少ないことが見いだされた。ここでの分析結果から見えてくる課題は、2004年以降の実践数の減少、批判性の要素が少ない実践、社会的な文脈で読み解く要素を含む実践事例や自分の価値観にまで眼差しを向けさせるような実践事例の少なさと、その重要性についての認識が十分とはいえない点が示されている。

第4章では、日本の学校教育における学びの課題を学習指導要領の学習観を中心に示している。主には戦後初めて作られた1947年と1951年の指導要領に見られた「批判的学び」の要素は、その後、産業界の要請に応える形で編まれる中で消滅し、教育行政と経済界の関係の中で、学校現場で批判的学びの実践を行うことは希薄化され、その流れは国語科、情報科の実践において批判性の要素がほとんどないことに見て取れる。他方、社会科の指導要領では一貫して民主主義に関わる文言「平和で民主的な国家・社会の有為な形成者としての資質を養う」ことが目標とされるものの、背後にある政治的中立によって客観的知識重視で政治性の強い課題を避ける傾向によって、社会的

文脈でテキストを読み解く重要性の認識に到達しにくいことが述べられている。また、「総合的な学習の時間」でなされる実践も、教育現場での理解を得てその目的を果たしているとみるのは十分ではなく、個人的課題解決能力に重点が置かれている側面が強い。こうした日本の学校教育での学びのあり方が、中高生の社会への帰属意識や能動性の低さと関連があることが指摘されている。

第5章では、日本のメディア・リテラシー教育の課題を乗り越えるには、従来の学びのあり方を転換することだとしている。そのためにも客観的知識を問い直し、対話から新しい知識を生み出すような学びを創り上げること、そしてエンパワーメントに繋がるような学びのふり返りを行うことによって、さらなる学びに繋げていく事が重要だと論じている。そして、このような学びを実践するための手立てとして、クロスカリキュラムという方法、人権を軸に組み立てていく学び、生徒の側から授業を組み立てること、教材パッケージの具体的紹介などが提示され、それぞれについて事例を挙げている。たとえば、クロスカリキュラムでは、国語科でテキストを批判的に読み解くことを、社会科では社会的な文脈に関わって読み解くことを目標とし、それぞれの学びが統合されることによって新しい知識が生み出される可能性を見いだしている。筆者自身の実践として、高校生が自分たちの側から社会を読み解く批判的分析を積み重ね、獲得した視点を元に発信していく制作活動へ展開する事例は、生徒の生きている今という観点から組み立てることで、個人の問題を社会的な文脈で考察する視点を涵養する可能性を明らかにしている。最後に、イギリスの中等教育で使用されている教材パッケージの分析では、育てるべき市民の理念に基づいて学習計画が組み立てられ、同じ観点からメディアを分析するのに手がかりとなる理論や歴史的イベント、産業構造などの背景的知識が教材に含まれていることが明らかにされ、このような教材は、生徒の多角的な読みと深い洞察へと繋がる学びを生む可能性について指摘している。

【論文審査の結果の要旨】

本論文は以下の点で評価できるものである。

(1) 本研究は日本で展開されてきたメディア・リテラシーの教育実践が、子どもや生徒のエンパワーメントの学びという観点からみてどこまで到達しているか、また乗り越えるべき課題は何かを明らかにし、事例分析を通して整理しようとした点にある。2004年以降の事例数が減少し、確認できた実践事例を分析すると、そこに批判性を育成する要素が少ないことを示唆しているが、その一因は教育現場で生徒や子どもの「社会学的想像力」を育成する批判的な学びが重視されてこなかった点にあることを明らかにしようとしている。

(2) 従来の学びのあり方を変革していくことは極めて大きな課題であるが、高校教師としての自身の実践を通して得られた知見を踏まえ、その手がかりはやはりメディア・リテラシー教育実践にあるとする。それはメディア・リテラシーのプロセスが「客観的知識」を問い直すこと、対話を通して学び、新しい知識を生み出していくこと、ふり返りをさらなる学びにつなげていくこと、このようなメディア・リテラシーの学びの実践そのものが子どもや生徒をエンパワーすることを見いだそうとしている。

(3) その上でローカルな実践事例の分析から得られた知見を基に理論を組み立て、さらにその理論で新たな分析を行い、見いだされた結果に基づいて理論を修正、精緻化していくという循環的な研究方法を行うことで、その成果を教育現場に還元していく可能性を追求しようとしている。こうした実践と理論の統合という方法で、メディア・リテラシー実践の展開を奨励しようとする提言を導き出そうとした点は評価される。

上記のように本論文は一定の評価をなすものではあるが、しかし十分でない点や残された課題もある。

(1) 藤井氏が本論文で使われている「エンパワーメント」「商業化」などの用語や概念についてどのような立場からこの用語を用いているのかといった、より丁寧な説明あるいは補足があると説得力は増したと考えられる。それは分析の根拠として挙げた「6つの要素」についても同様で、藤井氏は6つの要素をメディア・リテラシーの実践分析の枠組みに置き、そこから理論的整理を目指そうとしているが、教育現場で実践している教員がその枠組みを

